

## 外国語センター教官による研究の近況報告 (2001年10月から2003年11月まで)

久保田 正人

著書

(2001)『言語聴覚障害学』(共著)、新興医学出版社

論文

(2001)「promiseの意味と構造」『言語文化論叢』9号、pp. 39-55.

(2001)「主語の位置に生ずる、定冠詞を伴わない最上級」『意味と形のインターフェイス』、くろしお出版

(2002)「日本手話と日本語」『言語文化論叢』10号、pp. 13-24. (佐々木仁子との共著)

(2002)「英語において『ていねいさ』はどのように表現されるか」『言語文化論叢』10号、pp. 25-46. (清水さえ子との共著)

(2002)「分詞構文の文脈依存性」『英語青年』2002年11月号、pp. 490-491.

(2003)「分詞構文の使い方」『千葉大学英文学会ニューズレター』第50号、2003.6.27、pp. 7-9.

講演

(2002)「千葉大学における英語教育の改善について」大学英語教育学会中国・四国支部第19回支部大会(2002年6月9日)於高知工科大学

(2003)「千葉大学における外国語の授業評価」(2003年10月23日)於日本大学国際関係学部

**Paul D. Boswell**

The Critical Period Hypothesis for First and Second Language : A Review of Theories

Paul D. Boswell 千葉大学外国語センター『言語文化論叢』第11号, 2003年12月

Learning from Success : A Survey of American Intensive English Programs

Paul D. Boswell and Kikuko Shiina 千葉大学外国語センター『言語文化論叢』第11号, 2003年12月

The Future of English Education in Japan

Paul D. Boswell 千葉大学外国語センター『言語文化論叢』第9号, 2001年12月

**田端 敏幸**

論文

2002年 「日本語のA & B型オノマトペにおける母音配列について」『音韻研究第5号』pp. 87-90.

(日本音韻論学学会)

(56)

2002年 「日本語の母音融合に関する諸問題」『諸言語の音韻構造と音韻理論に関する総合的研究』  
pp. 109-120. 平成13年度研究成果報告書 (基盤研究A(1): 研究代表者 明海大学 原口庄輔)

2003年 “Remarks on Recessive Accent in Ancient Greek,” *A New Century of Phonology and  
Phonological Theory*. pp. 409-420. 東京: 開拓社

口頭発表

“On the Acquisition of Palatalized Affricates by Japanese Children,” presented at 13th  
World Congress of Applied Linguistics. 16-21 December, Singapore.

“Recessive Accent in Ancient Greek and Its Theoretical Implications,” presented at Interna-  
tional Conference: From Representations to Constraints. University of Toulouse-Le Mirail,  
France. 7-11 July 2003.

## 椎名 紀久子

英語CALL教材の高度化の研究

高橋秀夫、竹蓋幸生、村田年、大塚達男、水光雅則、椎名紀久子、西垣知佳子、土肥充、竹蓋順  
子。2001. 12『言語文化論叢』第9号、pp. 1-22.

*Learning from Success: A Survey of American Intensive English Programs*

Paul Boswell, Kikuko Shiina 2003. 12『言語文化論叢』第12号、pp. 109-119.

報告書

英語CALL教材の高度化の研究

竹蓋幸生、高橋秀夫、土肥充、椎名紀久子、西垣知佳子、田中慎、清野智昭、宗宮好和、水光雅  
則、大木充、吉島茂、細谷行輝、水町伊佐男、多和田眞一郎、柿沼義孝、鏡一三、竹蓋順子  
2002. 3『特定領域研究 (A) 高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究、  
研究成果報告書平成13年度計画研究』、pp. 241-257、pp. 267-269.

市販英語CD-ROM教材の認知心理学分析と考察 -外国語CALL教材の高度化に向けて

2002. 3『研究成果報告書平成13年度計画研究』、研究代表者坂本昂、pp. 258-266.

英語CALL教材 Listen to Me! によるコミュニケーション能力の養成

2003. 3『研究成果報告書平成14年度計画研究』、研究代表者坂本昂、pp. 495-497.

口頭発表

三ラウンド制の指導理論に基づいた日本語CALL教材の開発

椎名紀久子、楊 方2001.10.13 ” 外国語教育メディア学会関東支部110回 (2001年度) 研究大  
会 (於 常磐大学)

CALLの有機的活用による英語教育システム -基礎的研究 郭賢美、及川邦裕、椎名紀久子

2001.10.13 外国語教育メディア学会関東支部110回 (2001年度) 研究大会

(於 常磐大学)

三ラウンド・システムに基づいた英語CALL教材の開発とその試用 土肥充、竹蓋幸生、高橋秀

夫、椎名紀久子、西垣知佳子、竹蓋順子 2001.11.24 日本教育工学会第17回全国大会（於鹿児島大学）

英語CALL教材の高度化に向けた市販CD-ROM教材の分析的考察 椎名紀久子、西垣知佳子  
2002.1.28 特定領域研究（A）高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究、平成13年度第2回領域全体会議（於 学術総合センター）

CALLシステムの評価法について 西垣知佳子、椎名紀久子  
2002.7.8『高等教育改革とマルチメディア』、特定領域研究（A）高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究。（於 学術総合センター）

CALLを有機的に導入したCSCLによる英語教育システムの開発と実践 椎名紀久子、郭賢美。  
2002.9.7 ” 第41回（2002年度）JACET全国大会大学英語教育学会（於 青山学院）

CALL and Human Interface - Four Pillars of an Integrative EFL Learning Matrix : CALL, L1, L2 Speaker Teachers, Student Abroad Programs Collaboration, and Study Abroad Programs 椎名紀久子、Lorene Pagcaliwagan, 郭賢美。2002.10.4 The Korea Association of Multimedia Assited Language Learning, 2002 KAMALL International Conference (at Seoul Edcation Training Institute, Seoul)

CALL千葉大学の場合 2002.10.3 文京学院大学シンポジウム、実践：CALLによる英語教育（於文京学院大学）

Development of a CALL System to Teach Vocabulary for the TOEIC Test

中條清美、椎名紀久子、西垣知佳子 2002.12.17 13th World Congress of Applied Linguistics, Association Internationale de Linguistique Appliquee, (AILA2002), at Singapore

認知的学習作業を重視した時事英語語彙の学習用CD-ROM教材の開発

椎名紀久子、中條清美2003.8.1 第43回（2003）外国語教育メディア学会全国研究大会（於関西外国語大学）

学会 シンポジウム等のコーディネイタ、パネリスト

IT化時代の外国語教育 —学習者の多様化にメディアでどう応えるか

「全体シンポジウム：学習者の多様化にメディアでどう応えるか」2002.8.2

外国語教育メディア学会（LET）第42回（2002年度）全国研究大会

これからの外国語教育における教育メディアの活用 —LL、コンピュータ、CALLでできること

「最新の学習理論に基いた外国語教育を目指して」2003.11.8 外国語教育メディア学会（LET）

関東支部 第113回（2003年度）研究大会

講演

実践的コミュニケーション能力の育成 —「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想をふまえて 2002.12.14 ” 千葉県教育研究会英語教育部会、県高等学校教育研究会英語部会主催、第23回英語教育研修会（於 プラザ菜の花）

(58)

英語ができると世界が広がる

2003.5.17 NPO歴史文化交流フォーラム（於 渋谷アイビスビル）

ポスターセッション

英語CALL教材College LifeシリーズCD-ROM 2003.1

土肥充、高橋秀夫、水光雅則、椎名紀久子、西垣知佳子、竹蓋順子、竹蓋幸生

特定領域研究（A）高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究、平成14年度第2回領域全体会議（於日本科学未来館）”

## 大山 中勝

『わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究—大学の学部・学科編—』伊部哲、大山中勝、以下15名省略掲載順番6番目、大学英語教育学会実態調査委員会、（平成14年9月）

“Uncertain Utterances by Japanese University Students,” 千葉大学外国語センター『言語文化論叢』第11号、pp. 73-90、（平成15年3月）

『わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究—大学教員編—』伊部哲、大山中勝、以下15名省略掲載順番6番目、大学英語教育学会実態調査委員会、（平成15年9月）

## 高橋 秀夫

論文

「英語CALL教材の高度化の研究」、高橋秀夫、竹蓋幸生、村田年、大塚達雄、水光雅則、椎名紀久子、西垣知佳子、土肥充、竹蓋順子、『言語文化論叢』、第9号、2001、pp. 1-22.

「英語総合力養成のための教材の開発とその試用」、竹蓋順子、竹蓋幸生、高橋秀夫、土肥充、*Annual Review of English Language Education in Japan*、第13巻、2002、pp. 199-208.

「語彙力と実用コミュニケーション能力の関係」、中條清美、竹蓋順子、高橋秀夫、竹蓋幸生、*Language Education & Technology*、第39号、2002、pp. 105-115.

「Windows版CALL英語学期末試験実施システムの開発」、『言語文化論叢』、第10号、2002、pp. 47-59.

「英語コミュニケーション能力を養成するための初中級CALL教材の開発」、高橋秀夫、竹蓋幸生、水光雅則、土肥充、竹蓋順子、『言語文化論叢』、第10号、2002、pp. 61-70.

「米国大学新聞における語彙」、『言語文化論叢』、第11号、2002、pp. 131-143.

「英語CALLシステム用单元別試験実施システムの開発」、第12号、2003

教材開発

CALL教材シリーズ 英語初中級、Listen to Me! *Introduction to College Life*、竹蓋幸生、高橋秀夫、土肥充、竹蓋順子、千葉大学、2002.

CALL教材シリーズ 英語上級、Listen to Me! *College Life II*、竹蓋幸生、高橋秀夫、土肥充、竹蓋順子、千葉大学、2003.

CALL教材シリーズ 英語中級 Listen to Me! *English for Science 1*, 竹蓋幸生、高橋秀夫、土肥充、竹蓋順子、メディア教育開発センター、2003.

CALL教材シリーズ 英語中上級 Listen to Me! *English for Science 2*, 竹蓋幸生、高橋秀夫、土肥充、竹蓋順子、メディア教育開発センター、2003.

#### 口頭発表

「3ラウンド・システムに基づいた英語CALL教材の開発とその試用」、土肥充、竹蓋幸生、高橋秀夫、椎名紀久子、西垣知佳子、竹蓋順子、日本教育工学会、第17回全国大会（於鹿児島大学）、平成2001. 11.

「中級英語 CALL教材“College Life”の使用効果」、外国語教育メディア学会、第42回全国研究大会（於大妻女子大学）、2002. 8.

「CD-ROM教材College Lifeの試用効果」、特定領域研究(A)高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究、平成14年度第2回領域全体会議（於日本科学未来館）、平成2003. 1.

#### シンポジウム、研究会

「外国語センターCALLシステムにおける英語指導」、千葉大学外国語センター、第1回外国語シンポジウム（於千葉大学）、2002. 1.

「千葉大学外国語センターにおけるCALLの導入と実践」、平成13年度徳島大学全学共通教育FD特別講演会（於徳島大学）、2002. 3.

「語学教材制作講座教材化演習Ⅰ、Ⅱ」、竹蓋幸生、草ヶ谷順子、高橋秀夫、メディア教育開発センター語学教材制作講座（於京都大学）、2002. 8.

「実践：CALLによる英語教育 ケーススタディー報告 東京大学の場合」、文京学院大学シンポジウム、2002. 10.

#### ポスターセッション

「多様なレベルの学習者に対応した英語CALL教材の開発」、特定領域研究(A)高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究、土肥充、竹蓋幸生、水光雅則、高橋秀夫、竹蓋順子、中條清美、平成14年度第1回領域全体会議（於学術総合センター）、2002. 1.

「英語コミュニケーション能力を養成するための初中級CALL教材の開発」、土肥充、竹蓋順子、高橋秀夫、竹蓋幸生、外国語教育メディア学会、第42回全国研究大会（於大妻女子大学）、2002. 8.

「英語CALL教材 College LifeシリーズCD-ROM」、特定領域研究(A)高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究、土肥充、高橋秀夫、水光雅則、椎名紀久子、西垣知佳子、竹蓋順子、竹蓋幸生、平成14年度第2回領域全体会議（於日本科学未来館）、2003. 1.

## 土肥 充

### 論文

(60)

「英語CALL教材の高度化の研究」、高橋秀夫、竹蓋幸生、村田年、大塚達雄、水光雅則、椎名紀久子、西垣知佳子、土肥充、竹蓋順子『言語文化論叢』、第9号、2001、pp. 1-22.

「英語コミュニケーション能力を養成するための初中級CALL教材の開発」、高橋秀夫、竹蓋幸生、水光雅則、土肥充、竹蓋順子、『言語文化論叢』、第10号、2002、pp. 61-70.

「英語総合力養成のための教材の開発とその試用：科学研究費補助金による研究」、竹蓋順子、竹蓋幸生、高橋秀夫、土肥充、Annual Review of English Language Education in Japan, 13, 2002, pp. 199-208.

#### 事典

「英語のコーパス」、『応用言語学事典』（小池生夫編）、研究社、東京、2003、pp. 612-618.

#### 研究発表

「多様なレベルの学習者に対応した英語CALL教材の開発」、特定領域研究(A)高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究、土肥充、竹蓋幸生、水光雅則、高橋秀夫、竹蓋順子、中條清美、平成13年度第2回領域全体会議、平成14年1月28日、於学術総合センター。

「英語コミュニケーション能力を養成するための初中級CALL教材の開発」、土肥充、竹蓋順子、高橋秀夫、竹蓋幸生、外国語教育メディア学会第42回全国研究大会、平成14年8月1日、於大妻女子大学。

「ケーススタディー報告：千葉大学の場合」、土肥充、椎名紀久子、『実践：CALLによる英語教育』、文京学院大学シンポジウム、平成14年10月30日、於文京学院大学。

「英語CALL教材 College LifeシリーズCD-ROM」、特定領域研究(A)高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究、土肥充、高橋秀夫、水光雅則、椎名紀久子、西垣知佳子、竹蓋順子、竹蓋幸生、平成14年度第2回領域全体会議、平成15年1月26日、於日本科学未来館。

#### 教材開発

CALL教材シリーズ 英語初中級 Vol. 1, Listen to Me! Introduction to College Life, 竹蓋幸生監修、千葉大学、2002.

「ヒアリングマラソン中級コース」、Vols. 1~6、竹蓋幸生総合監修、アルク、東京、2002~2003.

CALL教材シリーズ 英語上級 Listen to Me! College Life II, 竹蓋幸生監修、千葉大学、2003.

CALL教材シリーズ 英語中級 Listen to Me! English for Science 1, 竹蓋幸生監修、メディア教育開発センター、千葉、2003.

CALL教材シリーズ 英語中上級 Listen to Me! English for Science 2, 竹蓋幸生監修、メディア教育開発センター、千葉、2003.

## Glenn Koch

“Contrastive and Error Analysis in Teaching English as a Second Language” 千葉大学外国語センター言語文化論集2001、第8号、51-60.

## Lorene Pagcaliwagan-Davis

### Published Works:

- (Forthcoming) Pagcaliwagan-Davis, L. (2003). The Effects of Introspective Journal Writing on Learner Proficiency in Second Language Learning. *Papers on Languages and Cultures*.
- Pagcaliwagan-Davis, L. (2002). La Retroalimentación correctiva en el aprendizaje de los idiomas extranjeros. *Papers on Languages and Cultures*.
- Pagcaliwagan-Davis, L. (2002) Back-channeling: A study in sociolinguistic variation. *Papers on Languages and Cultures*, 10, 91-96.
- Pagcaliwagan-Davis, L. (2001). The Role of the L1 in the L2 Classroom. *Papers on Languages and Cultures*, 9, 71-76.
- Pagcaliwagan-Davis, L. (2001) La Competencia Nativa: ¿Una meta para todos los estudiantes? *Papers on Languages and Cultures*, 8, 41-50.
- Takefuta, Y., Takefuta, J., Doi, M., Takahashi, H., Nishigaki, C., Shiina, K., Pagcaliwagan, L. (1999) Listen to Me! People Talk (CD-ROM). NHK Corporation.
- Takefuta, Y., Takefuta, J., Doi, M., Takahashi, H., Nishigaki, C., Shiina, K., Pagcaliwagan, L. (1999) Listen to Me! College Lectures (CD-ROM). NHK Corporation.
- Pagcaliwagan, L. and C. Blackmon (1997). “Small World: Language and Culture for Children (FLES and the Foreign Language Standards)” in Terry, R.M. *Addressing the Standards in Foreign Language Learning: Dimension '97*. Valdosta, GA: Southern Conference on Language Teaching.

## 田中 慎

### 論文

1. TANAKA, Shin (2002a): Der Mensch im Akkusativ: Universalität und Sprachspezifik der Akkusativität. in: R. Rapp (Hg.) *Sprachwissenschaft auf dem Weg in das dritte Jahrtausend*, 227-235. Peter Lang. (ドイツ語: 邦題「対格として現れる人間: 対格の普遍性と個別言語的性質」)
2. TANAKA, Shin (2002b): Der Präsident *selbst* hat *selbst* schon mal die Lösung nicht *selbst* gefunden: *selbst* als Abtönungspartikel? in: 千葉大学外国語センター言語文化論叢 10、1-12. 千葉。(ドイツ語: 邦題「Der Präsident *selbst* hat *selbst* schon mal die Lösung

(62)

nicht *selbst* gefunden : ニュアンス詞としての*selbst*」)

3. TANAKA, Shin (2002c): *Zu Hause wird nicht gearbeitet !* : das impersonale Passiv im Deutschen. in: Japanische Gesellschaft für Germanistik (Hg.) *Grammatische Kategorien aus sprachhistorischer und typologischer Perspektive*, 127-141. München. (ドイツ語: 邦題「*Zu Hause wird nicht gearbeitet !* : ドイツ語の非人称受動」)
4. 細谷行輝/田中愼 (2002): ネットワークCALLシステムの構築(1). in: 科学研究費補助金特定領域研究「高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究」報告書。東京。(日本語)
5. 細谷行輝/田中愼 (2003): ネットワークCALLシステムの構築(2). in: 科学研究費補助金特定領域研究「高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究」報告書。東京。(日本語)
6. TANAKA, Shin (2003): *Im Anfang ist das Topik—Topik-Merge: Generierung des Nicht-Argument-Topiks—*. in: (日本独文学会編) *Neue Beiträge zur Germanistik*. Band 2/Heft 2. 48-60. (ドイツ語: 邦題「初めにトピックありき—トピックのマージ: 非項トピックの生成」)
7. TANAKA, Shin (2003): *Topik-Merge und Topikprogression*. 2002年度北海道ドイツ文学会夏季研究発表会講演原稿。in: 千葉大学外国語センター言語文化論叢12. (ドイツ語: 邦訳「トピックのマージとトピック展開」)
8. TANAKA, Shin/SEINO, Tomoaki (2003): Zur Entwicklung eines Online-CALL-Systems und eines dazu integrierten Grammatikprogramms. in: 21-27. ドイツ語情報処理研究14号。大阪。(ドイツ語: 邦訳「オンラインドイツ語CALLシステムおよび付属文法プログラムの開発」)

#### CD-ROM

1. 細谷行輝/岩居弘樹/市岡正適/清野智昭/田中愼/吉島茂 (2003): CALLドイツ語—Einblicke und Grammatik—. 科学研究費補助金により製作。Grammatik部分を清野智昭氏(千葉大学)と担当。

#### 翻訳

1. Weinrich, Harald (1993): *Textgrammatik der deutschen Sprache*. Duden-Verlag. (脇坂豊他訳「テキストからみたドイツ語文法」。三修社。2003.) 9章造語論(原文913-1,079)を江口豊氏(北海道大学)と担当。

#### 口頭発表/ポスターセッション

1. Der Präsident *selbst* hat *selbst* schon mal die Lösung nicht *selbst* gefunden : ニュアンス詞としての*selbst*. 於: 2001年度日本独文学会秋季研究発表会。2001年10月。信州大学。(日本語)
2. ネットワークCALLシステムの構築(1)。ポスターセッション。於: 科学研究費補助金特定領域研究「高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究」平成13年度全体会



- 議。2002年1月。東京。(日本語：細谷行輝氏/岩居弘樹氏 (大阪大学) と)
3. Die “passive” Diathese im Japanischen und Deutschen. Argumentreduzierung–Argumenterweiterung. 於：ワークショップ “Operations on Argument Structure–Focus on Japanese and German”. 2002年3月。ベルリン自由大学 (ドイツ)。(ドイツ語、清野智昭氏 (千葉大学) と：邦題「日本語、ドイツ語のいわゆる受動態について：項の削減と項の拡張という視点から」)
  4. トピックのマージとトピック展開。於：2002年度北海道ドイツ文学会夏季研究発表会。2002年7月。北海学園大学。(日本語)
  5. Topik–Merge: Generierung des Nicht–Argument–Topiks. 於：第30回日本独文学会言語学ゼミナール。2002年8月。京都。(ドイツ語：邦題「初めにトピックありき→トピックのマージ：非項トピックの生成」)
  6. Eine Typologie des Topiks. 於：第37回Linguistisches Kolloquium. 2002年9月。イエーナ大学 (ドイツ)。(ドイツ語：邦題「トピックの類型論：言語対象研究の観点から」)
  7. Topikeigenschaften und Satzorganisation—eine Kontraststudie zwischen Deutsch und ostasiatischen Sprachen—. 於：ワークショップ “Deutsche Syntax aus historischer Sicht”. 2002年10月。関西大学。(ドイツ語、Patrick Kuhnel氏 (Passau大学/千葉大学) と：邦題「トピックの性質と文の組織—ドイツ語と東アジア諸言語との対照研究」)
  8. ネットワークCALLシステムの構築(2)。ポスターセッション。於：科学研究費補助金特定領域研究「高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究」平成14年度全体会議。2003年1月。東京。(日本語：細谷行輝氏/岩居弘樹氏 (大阪大学) と)
  9. Eine sprachliche Isomorphie: Grammatikalisierung der Referenzherstellung. 於：第31回日本独文学会言語学ゼミナール。2003年8月。京都。(ドイツ語：邦題「言語の同形性：指示作用の文法化」)
  10. Gattung und Individuum (1): Referenz der Nominalphrase. 於：2003年度日本独文学会秋季研究発表会。2003年10月。東北大学。(ドイツ語：邦題「種類と個体(1)：名詞句の指示」)
  11. テクスト言語学は成功したのか？Harald Weinrichのテキスト文法を評価する。於：2003年度北海道ドイツ文学会冬季研究発表会。2003年12月。北海道大学。

## 清野 智昭

ドイツ語を書いてみよう！ 単 2002年3月 白水社

ドイツ語ハンドブック 共 (50%) 2002年5月 三修社 岡田公夫 (横浜市立大学) との共著

ドイツ語の対格のプロトタイプ —格研究の歴史と今後の展望— 単 2002年10月 新しいドイツ語文法構築への試み —命題の成立条件とその周辺—。井口靖編 日本独文学会研究叢書 011号

CALLドイツ語 —EinblickeとGrammatik—

(64)

(科学研究費補助金により製作したCD-ROM教材) 共 (50%) 2003年1月 細谷行輝 (大阪大学) / 岩居弘樹 (大阪大学) / 市岡正適 (埼玉医科大学) / 田中愼 (千葉大学) / 吉島茂 (聖徳大学) の諸氏との共同製作。科学研究費補助金成果。

Zur Entwicklung eines Online-CALL-Systems und eines dazu integrierten Grammatikprogramms. 共 (50%) 2003年11月 ドイツ語情報処理研究14号。大阪。田中愼 (千葉大学) 氏との共著

口頭発表

Die Experiencerkodierung im Deutschen und im Japanischen. 2002年9月28日

Erstes Internationales Kolloquium der Japanischen Gesellschaft für Germanistik in Niigata (国際会議でのドイツ語による口頭発表)

Experiencer und Possessor im Deutschen und im Japanischen 2003年8月28日 日本独文学会 語学ゼミナールでのドイツ語による口頭発表

雑誌記事など

基礎ドイツ語 「中級文法への招待」 連載 2003年4月～2004年2月 三修社

基礎ドイツ語 「マンガでドイツ語！」 連載 2003年4月～2004年2月 三修社

## 山岡 捷利

論文

美食学小論『言語文化論叢』第9号、千葉大学外国語センター、2001年12月。

ゲンスブール・メモ『言語文化論叢』第11号、千葉大学外国語センター、2002年7月。

アルコール、ドラッグ…そして表現『言語文化論叢』第12号、千葉大学外国語センター、2003年12月。

## 泉 利明

論文

文学の過去と現在(二)―スタール夫人『言語文化論叢』第10号、千葉大学外国語センター、2002年7月。

英語・フランス語の過去時制と小説の語り (櫻井昭男と共著)『言語文化論叢』第12号、千葉大学外国語センター、2003年12月。

## 高橋 信良

論文

劇中劇―安部公房の演劇論Ⅲ『言語文化論叢』第11号、千葉大学外国語センター、2002年12月。

講演

ハイナ・ミュラーとアルトー 主催：日本大学芸術学部演劇学科、2003年9月30日 於：日本大

学芸術学部。

## 御子柴 道夫

著書

(2003) 『ロシア宗教思想史』、成文社、2003年3月

論文

(2002) Расхождение Владимира Соловьева и Константина Леонтьева во взглядах на идеи Достоевского «всемирная гармония» и «всечеловеческое единение».

(ドストエフスキイの「全世界的調和」と「全人類の統一」のイデーに対するソロヴィヨフとレオンチェフの見解の相違について)

XXI век глазами Достоевского: перспективы человечества. М., 2002.

発表

(2003) Эсхатология Владимира Соловьева.

(ウラジーミル・ソロヴィヨフの終末論)

国際ローゼフ学会 (2003年10月15日) 於モスクワ

## 周 飛帆

論文

戦前アメリカにおける華人学校『比較・国際教育』第11号、2003年3月。

## 橋本 雄一

研究論文

象徴をこえて描写の地平へ—梁山丁による文学テキスト「拓荒者」の多様なコード『言語文化論叢』第12号、千葉大学外国語センター、2003年12月。

満映から“東影”へ—新中国のヒロイン映画「中華女兒」と「趙一曼」『朱夏』第18号「特集・スパークする視覚宣伝—日本・中国」(せらび書房)、2003年6月。

胡適の大連講演、傅立魚そして1920年代大連の空気『中国文芸研究会会報』第250期記念号(同研究会)、2002年9月。

「満洲国」の文学についての中国側研究—九十年代『朱夏』第16号「特集・植民地へのアプローチ・この十年」(せらび書房)、2001年12月。

「満洲国」の中国語文学と「満洲国」文学研究会『近現代東北アジア地域史研究会NEWS LETTER』第13号(同研究会)、2001年12月。

コラムなど

中藪英助のなかの“同時代”—『鳥居龍蔵伝』『榎本武揚シベリア外伝』『朱夏』第17号「特集・追悼 中藪英助」(せらび書房) 91~94頁。: 2002年9月。

(66)

女子学生たちの“ア・デイ・イン・ザ・ライフ” —金音の小説『中国図書』2002年4月号（内山書店）2～3頁。：2002年4月。

テキストの原郷、テキストの異郷—爵青「帰郷」と武田泰淳訳『中国図書』2002年2月号（内山書店）2～3頁。：2002年2月。

「満洲国」文学研究会とその定例会についての報告『中国図書』2001年12月号（内山書店）2～3頁。：2001年12月。

#### 翻訳

（短篇小説）人生のなかのある一日（金音著）『植民地文化研究』第2号、植民地文化研究会、2003年6月。

#### 張 佩霞

中日両言語における多項連体修語の語順の比較（張佩霞 王彩麗）

『中国における日本語教育の変遷及び展望』徐敏民、韓小龍編 上海三聯書店、2002年。

含意される格関係から見る日本語の連体助詞「の」、『言語文化論叢』第11号、千葉大学外国語センター、2002年12月。

語順から中日連体修飾構造の異同を考える、『対照言語学研究』第12号、海山文化研究所、2002年12月。